

中国の女詩人たち

中津濱 渉著



朋友書店

中国の女詩人たち

中津濱 渉著



朋 友 書 店

著者

1919 鹿児島県阿久根市に生まる

1949 京都大学文学部（中国文学専攻）卒業

現在・武庫川女子大学講師

著書

楽府詩集の研究（文部省刊行助成）汲古書院

芸文類聚引書索引 中文出版社

初学記引書引得 彙文堂書店

漢詩 三省堂

現住所 〒562 箕面市新稲7-14-18

中国の女詩人たち

定価 2,800円

昭和56年2月1日印刷

昭和56年2月10日発行

著者 なか中 つ津 はま濱 わたる渉

発行所 朋 友 書 店

〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8番地

電話 京都(075)761-1285 振替 京都11428

印刷所 明文舎印刷株式会社

〒601 京都市南区吉祥院池ノ内町10

ISBN4-89281-005-C1098

¥ 2800 E

序

平岡武夫

収める詩二百、その選択を著者はいとおしむ。しかもその半ばは、初めて日本語の訳注をつけて紹介されたのである。著者のところは、当然、読者を求める。

読者は、開巻第一章の標題「慰問袋の歌」にとまどうかもしれない。慰問袋の歌とは、中国の詩語にない。はたせるかな、述べるところは寒衣である。中国では、むかじ、遠く、遠くに徴発されている男のために、女が冬衣裳を送った。思いを綿にこめて幾重にも詰めた。日ごろの寸法に仕立てたが、不恰好にだぶつきはせぬかと、男が苦勞に瘦せていることを恐れた。

著者は、召集されて、中国に三年在留した。その間に受けとった女性からの慰問袋が、著者の思いを寒衣の詩にかよわせたのであろう。敗戦帰国の後に、あらためて京都大学に進み、中国文学を専攻した。慰問袋が著者の人生に重要な転機を与えたのである。そしていま齡は華甲、人生を見つめなおす時にある。これまでの文稿をまとめて世に出すところに、人は共感できよう。出征という名の強制された境遇にあつて、中国の女性の詩に心を傾けた著者の人柄と、それをなさしめた中国の詩の魅力とのめぐり合いを、私はとうとぶ。

中国の女詩人といえ、私たちは佐藤春夫氏の名著『車塵集』を思う。著者もまた本書に「車塵集の女詩人たち」の一章を立てる。そして佐藤氏が選ぶ唐宋の名媛を、著者もまた採り上げる。ただし

佐藤氏は人ごとに原則として一首を述べるに止まるが、著者は自分の欲する所に従うて作品を選び集める。その総数は三倍に達する。本書全八章のうち、この章がもっとも多くの紙幅を占めている。また、全体として著者は訳詩に訓読調を用いているのに、本章ではつとめて佐藤氏なみに国ぶりの訳をつけている。製作意欲が昂揚しているのである。出版意欲もおのずからにたかまる。書名を『中国の女詩人たち』ときめた理由もここにある。国ぶりの訳の成果は、読者の鑑賞にまかせよう。佐藤氏が「原作者の事とその他」の項に述べている所を、さらに掘り下げ拡げることにおいては、著者は功を収めているといえよう。

書名の由る所は右のようにわかるが、実は、本書に収める詩篇は、閨秀作家の作品よりも男性詩人の作品の方が多いのである。ただしこれらの男性詩人は、当の女流詩人またはその作品をとりまく人たちであり、あるいは女性に代って女性のところを女性以上にこまやかに歌い上げる人たちである。女詩人を述べる著者の筆は、これらの作品に及ばずにはおれなかったのである。

筆はさらに伸びて、宮廷の女の閉ざされた生活、民間の説話や行事、読書人の運命などにひろがり、読者に脱線を恐れさせる。しかし著者が興趣にまかせて奔る所を一緒になつてはしるのも、読者の一つの楽しみであろう。

著者は、それぞれの作品の詩意詩境を物語風に仕上げることを主旨としているためであろう、詩のことばの一つ一つの解説に委曲をつくしていない場合がある。続篇をなす時には、周到な用意が望ましい。

ちなみに、著者には『楽府詩集の研究』があつて、すでに出版され、学界に裨益している。

一九八一年一月

目次

序

平岡武夫

I 慰問袋の歌 1

一、綿入れの軍服 2

二、前線へ衣類を送る妻 7

三、送衣曲 16

II 長持唄 25

III 女の仇討ち 31

一、秦女休の物語 32

二、龐娥親ほうがしんの物語 40

三、李白の「秦女休行」 47

四、謝小娥の物語 50

IV 女の操 53

一、石になった貞女 54

二、桑を摘む女 67

三、城壁も涙で崩れる 74

四、亡国の恨み―南宋滅亡哀歌 83

(一) 朱夫人と王清惠の物語 85

(二) 清

風嶺の悲歌 90

(三) 吳源の妻盧氏ろしの死 92

(四) 韓希孟の投身 96

(五) 徐

君宝の妻張氏の殉難 98

(六) 文天祥の死 101

(七) 伯顔バヤンの詩 103

V 『車塵集』の女詩人たち 105

- 一、はじめに 106 二、七歳女子 109 三、夷陵女子 111 四、張文姬 114
- 五、趙鸞鸞 116 六、劉采春 122 (付)「葉砧」の隠語について 132
- 七、杜秋娘 138 (付)「掖庭没入」について 149 八、「薄命女詞人」朱淑真 151
- 九、遠くて近きは——二十八字の媒 170 十、夢の通い路——丁渥の妻 177

VI 破鏡ふたたび円かに 183

- 一、徐徳言とその妻陳氏の物語 184 二、崔郊とその愛人の物語 193 三、売りに出された妻——徐孝克とその妻の物語 196 四、喬知之とその愛妾の物語 198
- 五、餅屋の女房の物語 200 六、慎氏の物語 203 七、薛媛の物語 204
- 八、楊志堅の妻の物語 207 九、戴復古とその妻の物語 210

VII 紅葉がとりもつ男女の縁 213

- 一、後宮の女性たち 214 二、紅葉が流れる御溝水 220 (一) 顧況と天寶宮人の物語 220 (二) 賈全虚と鳳児の物語 223 (三) 盧渥と韓氏の物語 224 (四) 于祐と韓氏の物語 226 (五) 侯継図の妻の物語 233 三、宮女たちの運命 237
- (一) 解放された宮女 237 (二) 墓守りの宮女——陵園妾 245 (三) 道士になる宮女 251 (四) 共同墓地に眠る宮女——宮人斜 256

VIII 試験地獄と詩人たち 263

一、末は博士か大臣か 264 二、ぶ男やどもりは落第 268 (付) 判決文の実

際 272 三、長安は物価が高いぞー白樂天の受験 275 四、馬鹿にされる明經^{めいけい}

出身 280 五、受験のためなら夫婦も別居 283 六、落第のたびに母親にぶた

れる 285 七、女房にハッパをかけられて及第 288 八、合格者の中から花

むこさがし 295 九、美人の膝を枕にー及第の歓喜 302 十、花を見る目も涙

ー落第の悲哀 310

主要引用書略解題 317

あとがき 319

索引 詩文索引 作者索引

〔カパー写真〕

唐・章懷太子(李賢)墓前室西壁壁画(觀鳥捕蟬)模写。一九七二年発掘。
陝西省乾^{せん}県。

李賢は、高宗(李治)の第六子、母は則天武后。上元二年(六七五)、
皇太子に立てらるるも、文明元年(六八四)自殺を命ぜらる。年三十
二(一説に三十四)、章懷と諡^{おくりな}せらる。諸儒をして『後漢書』に注せし
め、今に重んぜらる。

I
慰問袋の歌

一、綿^{わた}入れの軍服

「慰問袋」といっても、当今のいわゆる「戦争を知らない子供たち」には、何のことか分らないかも知れない。戦争が終ってからでもすでに三十余年、何らかの形で戦争にかかわりのあった人にも、もはやそれは「風化」した言葉であろう。十二月八日は、日本が米英に対し、天皇の名で宣戦を布告した日である。敗戦記念日は覚えていても、この日を記憶に留めている人は意外に少ないのではあるまいか。昭和十六年のこの日から、それまで中国大陆に限られていた戦線が、東南アジア・南太平洋へと、一気に拡大されたのである。召集につぐ召集、よほどの身体的故障のない限り、大部分の青壮年が戦場に狩り出され、しまいには学徒出陣という事態まで招いた。「慰問袋」というのは、当時の言葉でいえば、「銃後」から前線の将兵に送られた、慰問の品々を入れた袋のことである。肉親からわが子・わが父・わが夫に送られる場合もあるが、不特定の国民から不特定の将兵に宛てられるもの

も、もちろん多かった。それが縁となって、以後文通が交され、命拾いして帰還した将兵との間に、ロマンスの花が咲くということもあったらしい。戦争という悲惨な状況の中であって、慰問袋の中に封じこめられた、やさしい、あるいはたどたどしい手紙、母国の匂いをただよわせた、ささやかではあっても、心のこもった品々によって、将兵の気持がどんなにか慰められ、励まされたことであろう。中国の昔にあっても、戦いはひんぱんにくり返されたが、殊に唐代では、安祿山の乱（七五五年）や大規模な軍閥の叛乱があったほか、異民族との戦いが、多くは、遠く北西部の砂漠地帯で行われた。戦争に対する批判、戦いのむごたらしさを歌った作品も多いが、それらはいずれ紹介する機会もあるうから、ここでは、寒さのきびしい最前線、いわゆる塞外の将兵に送られた衣類に添えた詩によって、くしくも結ばれた兵士と宮女の話、前線にあるわが夫に衣類を送る妻の気持をテーマとした作品などを紹介してみたい。

玄宗（七一三～五五在位）の開元年間（八世紀半ば）の話である。天子から国境守備の将兵に綿入れの軍服が下賜されたとき、宮女（後宮——日本流に言えば大奥——の女性）たちがそれを縫うことになった。一人の兵士のもらった綿入れの中に一首の詩が入っていた。『全唐詩』は開元宮人（袍中詩）と題する。『全唐詩』については、三二七頁参照）

沙場征戍客

沙場 征戍の客

寒苦若為眠

寒苦 若為にか眠る

戰袍經手作

戰袍 手を経て作る

知落阿誰辺

知る 阿誰が辺にか落つる

畜意多添線

意を畜め 多く線を添え

含情更著綿

情を含め 更に綿を著く

今生已過也

今生 已に過ぎたり

重結後身縁

重ねて後身の縁を結ばん

遠く砂漠地帯の戦場におられる兵隊さん、寒くつらい夜をよくおやすみになれないことでしょう。寒さが防げますようにと、この手で縫いあげたこの綿入れ、どなたの手に入るかしら。心をこめていいねいに縫い、綿もたっぷり入れました。この着物を手にされる兵隊さん、あなたとはこの世ではご縁がございませんでした。できればあの世でなりと、ご縁がありますように。

兵士はこの事を部隊長に申し出たので、部隊長から玄宗に報告された。玄宗はあまねく後宮におふれを出した、「詩の作者は、隠さず名のり出よ、決して処罰はしないから」と。一人の宮女が「どのようなお仕置もいけません」と、おそろおそろ名のり出た。玄宗はその心根をたいそういじらしく思い、「わたしは、お前のために今生の縁を結んでかわそう」とのお言葉があつて、その詩を手に入れた兵士に、妻として与えられることになった。前線の将兵はこれを聞いて感泣したという。事は唐代の『本事詩』（三二七頁参照）という書物に見える。

この話のバリエーションと思われるが、玄宗の話から百年あまり後の、同じく唐の僖宗（八七四～八八在位）の時代に次のような話がある。宮廷から千着の綿入れを辺境の將兵に下賜されたことがある。神策軍（日本流に言えば近衛師団）の馬真（馬直）に作る本もある」という兵士の手に渡った綿入れに、金の鎖が入っており、一首の詩が添えてあった。（『全唐詩』は僖宗宮人（金鎖詩）と題する）

玉燭製袍夜　玉燭　袍を製るの夜

金刀呵手裁　金刀　手を呵して裁つ

鎖寄千里客　鎖は寄す　千里の客

鎖心終不開　鎖されし心は終に開かず

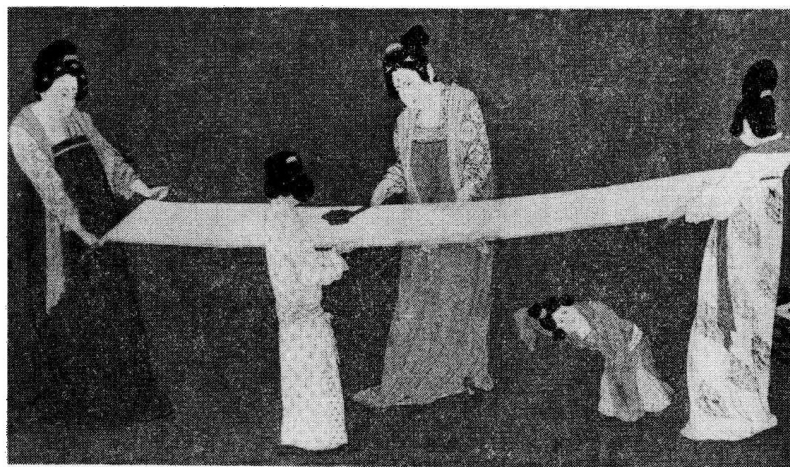
後宮のともしびのもとで、わたしはこの綿入れを縫いました。寒さでかじかみがちな、はさみ持つ手に、息を吹きかけ吹きかけて、縫いあげました。この金のかきは、遠い遠いところにおられる兵隊さんにさしあげますが、「鎖」のかけられたわたしの心は、いつになったら開けられることやら。

「玉燭」・「金刀」はそれぞれ「燭」・「刀」を美化した表現。「刀尺」（はさみとものさし）という語もある。裁縫を意味する。結句は、後宮にとじこめられたまま、空しく青春をすごす憂愁をのべたものである。

ところで、馬真はその金鎖を、市場に行つて売り払ってしまった。その事を指揮官に密告する人が

あり、指揮官はいちぶ始終を天子に奏上した。僖宗はただちに馬真を宮廷に呼びつけたが、罰を加えるどころか、その宮女を馬真の妻として与えた。のち、黄巢くわうせうの乱（八七五年）で都を追われた僖宗は、蜀しよく（四川省）へ落ちのびられた（八八一年）が、馬真は行在所あんにあって、昼夜、帯もとかず、僖宗の身辺を離れないでその警護に当ったという。宋代の計有功の『唐詩紀事』などに見える。別の書物によれば、この事に感動したある人が八金鎖曲きんせききよくという歌曲を作り、それが当たたいそう流行したという。

（『唐詩紀事』については、三一七頁参照）



火のしをかける宮女たち。「火のし」は、中に入れた炭火の熱を利用して布地に押しあてて、しわを伸ばしたり、ひだをつけたりするための金属製の器具。唐の張萱の図を宋の徽宗皇帝が模写したものといわれる。（ボストン美術館蔵）

二、前線へ衣類を送る妻

以上の二話、いずれも宮廷の奥向きの女性の話であるが、もちろん庶民の妻たちも、戦場にある夫のもとへ衣類を送ったのである。むしろその方が一般的であった。そういう妻の気持を歌った、張籍と王建の作を紹介しよう。張籍（七六八？～八三〇？）の作は「寄衣曲」と題する。

織素縫衣独苦辛

素を織り衣を縫い 独り苦辛す

遠因回使寄征人

遠く回使に因り 征人に寄す

官家亦自寄衣去

官家も亦た自ら衣を寄せ去る

貴従妾手着君身

妾の手従り君が身に着せんことを貴うも

高堂姑老無侍子

高堂 姑老い 侍子無く

不得自到辺城裏

自ら辺城の裏に到るを得ず

慇懃為看初着時

慇懃に為に看る 初めて着る時

征夫身上宜不宜

征夫の身上 宜しきか宜しからざるかを

わたしひとりの手で、苦勞を重ねて機も織り縫いもして、この着物を作りあげました。前線へもどる使いの者に托して、遠くにいらっしゃるあなたにお届けします。別にお上でも、出征兵士に着物が下賜されるようですが、わたし自身の手で作ったものをあなたに着てもらいたいです。ほんとうは、わたしが直接あなたのところへお届けしたいのですが、家には年老いた姑さんがおられ、その世話をする人がいなくなりますので、それもできません。でき上った着物があなたにぴったりかどうかと思ひまして、念入りに調べてみました。着心地はいかがででしょうか。

「貴」は願う、欲するの意。「高堂」は立派なざしきの意。夫の家庭に敬意を払ってこのように言つた。「刃城」は国境のとりで。

王建（七六八？～八三〇？）の作は△送衣曲▽と題する。

去秋送衣渡黄河

去秋 衣を送るは黄河を渡り

今秋送衣上隴坂

今秋 衣を送るは隴坂を上る

婦人不知道径処

婦人は知らず 道の径る処を

但問新移軍近遠

但だ問う 新移の軍の近遠を

半年著道経雨湿

半年 道に著き 雨を経て湿り

開籠見風衣領急

籠を開け 風を見れば 衣領急む

旧来十月初点衣

旧来 十月 初めて衣を点し

与郎著向営中集

郎の与に著して 営中に向かつて集む

絮時厚厚綿纂纂

絮は時れ厚厚 綿は纂纂

貴欲征人身上暖

貴欲うは 征人の身上の暖かならんことを

願郎莫著裹屍婦

願わくは 郎 著て屍を裹みて帰る莫かれ

願妾不死長送衣

願わくは 妾 死せず 長えに衣を送らん

去年送った着物は黄河を渡り、今年送った着物は隴坂を上る。女のわたしには、どこをどう通るのかわかりませんが、新しく移動した軍隊が、近くなったのか遠くなったのか、それだけでも知りたいものです。着物がお手許に届くには半年もかかるとのこと、それだけ長い道中では、雨に打たれてしめるでしょうし、行李をあけて風にあたると、えりのあたりはちぎんでしまうでしょう。例年、十月には着物の最初の点検があつて、それに間にあうようにと、あなたのためにわた入れを作つて、兵營に届けるのです。綿は、寒くないようにと、古いのも新しいのもどっさり入れました。あなたのおからだが、暖かでありますように願つております。どうかあなた、その着物に屍を包んでお帰りということになりませんように。どうかわたしが死なずにいつまでも、着物が送れますように。

「隴坂」は陝西省から甘肅省にかけての坂で、古楽府の「隴頭流水歌辞」に、西のかた隴坂を上る、羊腸のごとく九回す。山高く谷深く、覚えず脚酸むとか、隴頭歌辞に、朝に欣城（地名）を発し、暮に隴頭に宿る。寒くして語う能わず、舌巻きて喉に入るとか歌われた難所。「著道」は「道に